

ずいそう

生死の分かれ目

嶋津 日出光



寒いとある日の夕暮れ時、帰宅の途中一人で干物を肴に熱燗を一杯。(あれっ、干物が冷たい、でもまあいいか、うっ、喉に骨があがうっ 取れない!) 家に帰っておにぎりを頬張りやっとな骨が取れた感じ。

翌日会社に出勤したが何か熱っぽい感じ。

喫煙ルームでタバコを吸ってもあまり美味しくないし昼だというのに食欲もない。風邪を引いたかな? 今日は早く帰って寝ようと夕方帰宅し、早々床についたが熱のためか妻の歩く音がやけに高い。これはやばいかな? と思ったが時間も遅くなったので就寝。

翌日起きると熱も高く喉が痛く頬から耳にかけても大きく膨らんでいました。

これはまずいと思い早速近くの耳鼻咽喉科にでかけ、診てもらいましたが「喉の奥が腫れて化膿しているようだが、このクリニックでは手の施しようがないので近くの大きな病院を紹介するから直ぐに行きなさい」、でタクシーで直行。

KR 病院で初診の受付を済ませ該当科でしばらく待つと、担当医から呼ばれ治療室で診察と喉の奥の膿を抜き取り少し楽になったところで即入院。妻に携帯電話で入院が決まったので準備をしてもらう連絡を取り、ひとり立ちしている二人の子供たちにも連絡を取り人生の垢を取ることを告げました。

その日は病院の晩飯を食べて個室のベッドで就寝。翌日、朝7時から回診があり部長医に診てもらおうと「これは手術ですね、早く切除しなければ大変なことになる、昼から緊急手術をしますので準備してください」

担当医から手術の難易度や感染症、それと神経回復おくれによる手とか肩のリハビリなどの説明と手術の同意書への捺印。(同意書がやけに多いな、手術は2時間くらい、まあ大丈夫かな?) 実は手術は延々8時間近く続く!!!

1次麻酔をして手術室へ移動、手術台へ移されると吸気麻酔でそのまま睡眠状態へ————。

気がつくと(まだ手術中のはず)小さな部屋のベッドの上、耳を澄ますと上の息子が私の居場所を尋ねているが看護婦は此処には居ないの一点張り。声を出そうにも声が出ないので、近くにあったティッシュの箱を壁に投げつけるとぶつかる音はしたが話し声は途切

れる————。

次に気がつくとそこには妻が私の顔を覗きながら私の手をさすり何かを言っている。遠くには2番目の息子の顔も見える————。

次に目が覚めると天井には監視カメラが設置され私をじっと見ている。少し前方には大きな時計があり、12時のところには緑色の小人が、3時のところにはオレンジ色の小人が、9時のところには青色の小人がおり、それぞれの時間になると何人かの小人がそこに集まり遊んでいた。小人が呼んでいるような気がしてその都度そこへ行こうとするが、いつも決まって12時のグリーンの小人の時にしか連れていってもらえず、行くところはいつも決まって教会の様な所で、そこまで行くともいつも決まって小人達はどこかに消えていなくなりまたベッドに戻っている。

「お父さん、お父さん」妻が呼んでいる声でやっとな本当に目が覚め、あたりを見回すとICUのベッドの中で大きな点滴の袋が上から吊るされ、横には変なフィルタがありそこから透明なチューブが胸につながり、何がどうなっているのか妻に聞こうとすると声が出ない。妻はしきりに「今日は何日か知っている? 1週間も寝ていたのよ!」隣から看護婦さんが来て「よかったー、おめでとう、いまマジックと紙を持ってきましたから」聞くと酸素マスクが再三外れ、胸の肉と皮の間に空気がたまり、それを抜く手術と呼吸をするために喉に穴を開ける手術を寝ている間にやったとのことで、それで声が出ないことがやっとな理解できた。

その後は看護婦さんの適切なアドバイスなどもあり順調に回復しその1週間後には普通病棟に移り、また1週間後には最後の縫合手術を終えて更に1週間後には抜糸を終えて無事退院となりました。

後に確認したところオレンジ・グリーン・ブルーはそれぞれの看護病棟の色でオレンジ色の病棟は後遺症がひどくリハビリをするところで、ブルーは再手術が必要なところ(通称重症病棟)、グリーンは順調回復病棟であることが分かりました。

皆さん! 魚の骨といえども侮るなかれ!

御安全に!!